

論文審査の結果の要旨

博士の専攻分野の名称	博士 (保健学)	氏名	鍵浦 文子
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1・2 項該当		
論文題目 Brief HIV stigma scale for Japanese people living with HIV: validation and restructuring using questionnaire survey data (日本人向け HIV スティグマ尺度短縮版: 質問紙調査を用いた評価と再構成)			
論文審査担当者			
主 査 教 授 川崎 裕美		印	
審査委員 教授 宮下 美香			
審査委員 教授 森山 美知子			
〔論文審査の結果の要旨〕			
<p>抗 HIV 療法の発展により, 服薬アドヒアランスが良好な HIV 感染者の血液中のウイルスは抑制し続けることが可能になった。それにより, HIV 感染者の死亡率の減少, HIV 感染の伝播率の減少, 新規 HIV 感染者の減少をもたらした。服薬アドヒアランスを良好に保つためには, セルフケアが鍵となるが, それを阻むものにスティグマがあるといわれている。スティグマとは, 個人のもつある属性によって, いわれのない差別や偏見の対象となることであり, HIV に関連したスティグマは, 感染に至った経緯が社会的に受け入れがたい行為の結果としてみずから招いたものとしてみなされ, その結果が HIV に関連したスティグマとなっている。スティグマは HIV 感染症の有病率が低い国の方が強いといわれており, 日本は諸外国と比較し有病率が低いため, スティグマが強く, 日本人 HIV 感染者のセルフケアを阻害している可能性がある。しかし, スティグマを測定できる尺度が開発されておらず, 日本人の HIV 感染者のスティグマを測定できるツールが必要である。本研究では, 米国で開発された Brief measure of stigma の日本語版を作成し, 信頼性と妥当性を検証することを目的とした。</p> <p>まず, Wright ら (2007) が開発した 4 因子 10 項目から構成されるスティグマ尺度のフォワード・バックワードトランスレーション, 専門家委員会での確認, 5 名の HIV 患者に翻訳版の回答を依頼するパイロットスタディを実施した。専門家委員会では, 日本人には答えにくい質問が 3 項目あることが見つかり, 質問の言い換えを行った。パイロットスタディでは, わかりにくい設問等がないかを確認した。それらの過程により完成した尺度を HIV Stigma Scale Japanese short version (HSSj) と命名した。</p> <p>HSSj の信頼性と妥当性を検証するために, HSSj を使用した横断調査を実施した。調査対象は, 日本国内の 9 施設に通院する 20 歳以上かつ, HIV 感染症と診断されている患者である。2017 年 8 月~2018 年 2 月に実施し, 郵送法で回収した。分析には, 確証的因子分析, 信頼性係数, 探索的因子分析, スピアマンの相関係数を使用した。R version 3.5.1 と, R パッケージの lavaan, SemTools, psych を使用した。HSSj のスコアが正規分布ではなかったため, 分析はすべてノンパラメトリック検定を用いて実施した。</p> <p>確証的因子分析により HSSj が原版の構造と同じであるか妥当性を判断し, また信頼性の一つの指標である ω 係数を算出した。妥当性を判断するためのモデルの適合度は, χ^2 検定の p 値, CFI, TLI, RMSEA, SRMR を用い, それぞれが, 0.05 以上, 0.95 以上, 0.95 以上, 0.08 以下, 0.05 以下で妥当とした。ω 係数は 0.7 以上で妥当とした。それらの基準を満たしていない場合には, 探索的因子分析を行い, モデルを変更することとした。探索的因子分析では, 因子</p>			

数をスクリープロットと平行分析を用いて決定し、プロマックス回転で因子寄与率を算出した。

次に、表面妥当性と基準関連妥当性を検証した。表面妥当性は、未回答率にて評価し、5%以上の参加者が回答していない項目を妥当性が低いと判断した。基準関連妥当性の外的基準として Patient Health Questionnaire (PHQ-9)、とセルフエスティーム尺度を使用し、それぞれに対し、相関係数が 0.3 以上かつ有意な相関がみられた場合に妥当とした。

確証的因子分析による適合度指標の値は、p 値は 0.034, CFI は 0.999, TLI は 0.998, RMSEA は 0.035, SRMR は 0.037 であり、十分な値であった。しかしながら、二つの下位尺度での信頼性を示す ω 係数は、Disclosure 0.63, Public attitude 0.60 であり、基準を満たしていなかった。そのため、探索的因子分析を行った。探索的因子分析では 2 因子構造であることがわかり、第 1 因子を「社会のスティグマへの懸念」、第 2 因子を「否定的な自己イメージ」と命名した。因子寄与率が 0.4 よりも低かった項目 5 は除外した。内的整合性を示す ω 係数は、尺度全体と下位尺度において 0.83~0.89 となった。また、それらの PHQ-9 への相関は、0.37~0.45 で有意な相関があった。セルフエスティーム尺度との相関は -0.34~-0.51 であり、有意な相関があった。すべての項目の未回答率は 0.9%~1.8% と基準より低かった。

4 因子構造の中での二つの下位尺度が低い ω 係数を示したのは、米国と日本との文化的な差異、質問項目の言い回しの変更によるものと考えられた。また、それは、探索的因子分析の結果 2 因子構造になったことにも影響したと考える。HIV に関連したスティグマは、社会環境からの影響を受けやすく、社会的な環境の違いにより日本語版では三つの下位尺度が類似したものとなり、一つの因子として集まったと考えられる。

今回の研究で作成した 2 因子 9 項目の HSS-j は、十分な信頼性と妥当性があるものとなった。この尺度を使用することで日本人 HIV 感染者が抱えるスティグマが測定できるようになり、スティグマが QOL やセルフケア、うつなどの問題へ与える影響を明らかにすることが可能になった。

以上の結果から、本論文は日本人における HIV 患者のスティグマを測定することを可能にし、HIV 患者の効果的なケアに貢献するものである。よって審査委員会委員全員は、本論文が鍵浦文子に博士（保健学）の学位を授与するに十分な価値あるものと認めた。

最終試験の結果の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（保健学）	氏名	鍵浦 文子
学位授与の条件	学位規則第4条第①・②項該当		
論文題目 Brief HIV stigma scale for Japanese people living with HIV: validation and restructuring using questionnaire survey data (日本人向け HIV スティグマ尺度短縮版：質問紙調査を用いた評価と再構成)			
最終試験担当者			
主査教授 川崎 裕美			印
審査委員 教授 宮下 美香			
審査委員 教授 森山 美知子			
〔最終試験の結果の要旨〕			
判定合格			
上記3名の審査委員会委員全員が出席のうえ、令和2年1月16日の第162回広島大学保健学集談会及び令和2年1月16日本委員会において最終試験を行い、主として次の試問を行った。			
<ol style="list-style-type: none">1 尺度開発における信頼性と妥当性2 HIV患者におけるスティグマの概念特性3 HIV患者のスティグマ尺度における因子構造4 英語版尺度から日本語版を作成するための留意点5 HIV患者のケアへのHIVスティグマ尺度の活用			
これらに対して極めて適切な解答をなし、本委員会が本人の学位申請論文の内容及び関係事項に関する本人の学識について試験した結果、全員一致していずれも学位を授与するに必要な学識を有するものと認めた。			